

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 三島由紀夫 『午後の曳航』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 71 回のツイキャス読書会の課題図書は、三島由紀夫 『午後の曳航』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

『鍵のかかった部屋』

私は、鍵をかけられた理由がもっとすごい理由があるのだと勝手に思い込んでいて、お話の最初のほうであっさりと理由が書いてあることを教えていただいてすごく恥ずかしかったです。

自分でも何でそこを読み飛ばしたのか分からないのですが、きっと最後の方ですごい理由が書いてあると変な期待をしたからかもしれません。

私は女なので、女の子が夜に出歩くのは危険だと思いますが男の子なら少しぐらい良いのでは？ と、ずっと鍵をかけておくのは少し厳しすぎるようにも思いました。

それと、窮屈ながら鍵がかけられている事をそれほど苦痛に感じていなくて何だったら楽しんでいるようにも思えて、その鍵をかけられた生活があとからやって来た父親気取りの竜二にいと簡単に解放されて、それがかえって憎しみに変わったように思いました。

竜二が思ってたようなヒーローでは無くてただの大人だったし、今の自分の生活が脅かされるのではないかなと「悲しみよこんにちは」のセシルのように思ったのだとしたら気の毒にも思いました。

鍵をかけられている状態にいるから安心感のある子供の世界に居たのに急に放り出されたような気持ちになったのかなと思いました。

私は登とは正反対な考え方や生き方だと思うから、彼の事は理解するのは難しいなと思いました。

登が大人になったら自分の思うような生き方が出来るのかな？

もし、それができなかつたらどうするのかな？ と考えさせられました。

(おわり)

「午後の曳航」感想文

登の部屋は、外から鍵が掛けられ、完全に閉鎖された状態だ。鍵は、登の自由を縛るが、同時に登をかりうじて守っている。

登はひきだしの穴を見つけ母親の房子の部屋を覗く。房子の部屋も閉鎖されている。

ある日、母親の部屋に竜二が来ることで、房子の部屋は外の世界へ繋がった。

汽笛が響いた瞬間、登と房子、房子と竜二、竜二と海、海と登という輪が出来上がって登は海、外の世界との内的関連を見た。

登は感動し、それをなんとしてでも守ろうと強く思う。

登は竜二を英雄として尊敬した。

しかし、竜二は房子と結婚し、海から離れ、ただの陸の人間になってしまった。

父親になった竜二の計らいで、登の部屋の鍵が外される。

登の部屋は逆転して守られない外の世界になった。母親の部屋は再び閉鎖された場所となり、さらにそこへ繋がる穴は塞がれてしまう。登は完全に遮断され、放り出されてしまった。

登は守られたいと同時に、縛れた環境から反抗したいという思春期らしい相反した気持ちを持っていた。

母親を奪われるという、子供らしい危機感も感じている。

しかし、大人になる過程で芽生えた登の美意識と、首領の思想が物事を悲惨な方向へと発展させる。

首領は登以上に孤独だ。彼は、家中の部屋を自由に入り、家中の全ての書物を読み、世界の全てを知った。

首領は親に鍵さえ掛けてもらえない子供だ。

首領にはどんな扉にも 殺人の扉にさえも 鍵が掛かっていない。

首領は、自分たちが自由な存在だと考えている。世の中は空虚で、殺すことが世界の空洞を埋める方法だと主張する。

でも、少年法で守られた殺人は、結局は刑法という大人の枠組みの中で行われているから自由じゃないと思う。

空虚なのは世界ではなく首領自身だ。

無機質な家庭が彼を無感動な子供にした。

登の見た内的関連はもっと自由だった。登の純粋な船と海への憧れによって創造された唯一無二のものだった。

登は竜二を英雄にし、再び世界との内的関連を見ることができのだろうか。

首領は自由な存在になれただろうか。

(おわり)

人間の中途半端な肉体は、何ものにも打ち克つことができない。

この言葉が印象的だった。「あの三島由紀夫」らしいと思った。

台詞は、登のものでも、竜二のものでもなく、作家自身の自分へ課した使命のように感じた。

わたしがイメージしている三島像は、筋肉ムキムキの胸板、コントラストばきばきのモノクロ写真。本を読む前に知っていた三島由紀夫は、たしかに俳優さんみたいに格好いいと思うけれど、自分大好き過ぎるし、どうやら国を憂いて衝撃的に自害したし、自衛隊員を前にした有名な演説シーンは、どちらかといえばそれをモチーフとしたアート作品を知ってしまったので(森村泰昌の)もうその刷り込みから逃れられない。。くらい強烈だった。

そして「午後の曳航」。読んでみて感じたのは、たぶん、人一倍傷つきやすい繊細な心と、それを隠そうとする虚栄心。自信ありげな態度や言動とは裏腹にこんなに細やかな心情を気にしながら、美しいものを愛し、完璧な正義に憧れていたロマンチストな少年の心。その作家の声がたくさん見えてきて、胸がしめつけられた。

(引用はじめ)

あいつらが教育をはじめたのだ。怖ろしい破壊的な教育。すなわち彼に、このやがて十四歳になろうとする少年に、「成長」を迫ること。首領の言葉を借りれば、とりも直さず「腐敗」を迫ること。登は熱ばんだ頭で、一つの不可能な考えを追っていた。何とか僕が室内にいたままで、その同じ僕がドアの外側から、鍵をかけることはできないだろうか？

(引用おわり)

そう。その不可能ができれば、大人も腐敗せずに新鮮な空気だけを吸って生きていられるのに。そんな社会など机上の空論だということを作家も知っている。自分の身体を痛めつけて鍛えることで、自分自身である意味を求めていた作家は、だけど自分に社会にゆるせない部分があったのだろう。作品の中で少年たちに男を制裁させる。

あっけない結末は、彼らしい潔い「終わりの美学」。

あのと、空っぽの世界を憂いた少年たちが望むままに、竜二の身体は空っぽのプールの底に落ちてゆくのだろうか。人間のまだ誰も行ったことのない心の大海溝の奥底へ下りてゆく。その言葉通りに。

(おわり)

「ファスナーの中身」

海のない土地で育った私は子供の頃野山を駆け回っていた。山林に捨てられていたエロ本を友達と読んだり、車にはねられ道端に転がった狸の死骸を棒で突ついたり、学校の図書館にあった今思えばたいしたことのないが当時としては猟奇的だったり性的な表現のあるマンガ「カムイ伝」を読んでドキドキしていた事があった。

そんなクソガキだった私も思春期を経て大人になり、絶対することはないだろうと思っていたチャペルでの結婚式や結婚披露宴まで行い、泣くのをこらえながらスピーチをするなどの人生を送ってきた。

子供が生まれ、女の子向けアニメのキャラクターショーを見に行くといつも思う。

「あの中に入っている人たちは何歳くらいのどんな人だろう？ 時給はいくらぐらいなのか？ 弁当は支給されているのか？ 他にバイトを掛け持ちしてるいるんだらうか？」と子供の夢を壊すようないらぬ心配をしてしまう。

可憐に舞うスーパーヒロインの中身が私のようなおじさんだったら子供は失望するだろうが、大人には好感度1位のタレントが不倫したら、選挙で選ばれた政治家がグレーなお金を受け取っていたら、イメージを崩されたと失望しその対象を容赦なく叩く人がいる。

登の母房子や、その店の客の女優のように多くの人が家庭や仕事場で、自分や何かを守る役割を、背中のファスナーを閉め演じているように思う。

なのに無理して他人の背中のファスナーを開け、そこで見えてしまったものが自分が思っていたのとは違うと失望したり、時には怒り、時には逃げたりする人がいる。

登や首領達は大人や社会のファスナーの中身を知った気であるように私には感じる。

確かに首領の言うように人間も猫も同じ哺乳動物だ。皮膚の下は皮下脂肪と筋膜が覆い、心臓など各種内臓、器官や組織がある。人間に移植する為に育てられた豚の臓器が近く日本国内で流通するらしい。

だからとて猫や豚の命を人間が粗末に扱っていいはずはないし、人間の中で老若男女で優越がどう決まるのか。

法で罰せられなければ罪を犯してもいいのか？ ヤハウエイも、仏陀も「殺してはいけない、殺させてもいけない」と言っている。神と契約を交わしていなければ善悪は理解できないものか？

私もこの作品に出てくる少年たちに似たような経験をしてきたので、ここまでは彼らに一定の理解を示してきた。

これからは彼らから見たらつまらない、罪深い父親になった身として言いたい。

弱いものいじめはやめな。いつか君達の海のファスナーが開いて、そこに放り込まれて、嘘つきな大人になってしまっって二度と戻れなくなるよ。

(おわり)

「午後の栄光～栄光と共に墜落した竜～」

栄光を夢見ていた竜二は陸に降りることで船乗りとしてのプライドを棚の上にあげ、陸の生活をするようになる。彼が見限った栄光は少年たちの殺気に包まれた曳航のとき初めて彼の目の前に現れる。

東洋思想で「竜」は水の象徴として現れ、水神として祭られることが多い。登という時は登山、登攀(とうはん)のように陸の山を登るという意味を持っている。

陸に留まっている「登」は竜のように自由に空を昇る竜二のことに憧れた。しかし竜二は船の中を自分を縛り付ける監獄のように感じていた、去勢されかけていた竜であった。そして海の男の竜二はやがて母なる大地の乳房(房子)の誘惑に堕ちて一匹のつまらない蛇と化した。しかもそのつまらない男が「父」という形で自分さえ縛り付け去勢しようとしている。登はこれを受け付けない。醜い蛇となった男を再び竜にするために船員帽と船員服を着させてもっともらしい姿にさせたあと、処刑を行うことで竜二を救い、自分たちの醜い未来を救ったのだ。

物語はここで終わっている。処刑シーンやその後の登たちの行方については書かれていない。よく考えてみると彼らには暗い未来しか待っていない。法律上罰せられないとしても、彼らの家庭は壊れ、彼らの精神も彼らが大人になるにつれて腐り始めるだろう。そして、彼らは英雄を守った同時に英雄を失った。でも彼らはきっと違い英雄を夢見て、かつての竜二が大義を抱いていたように何かに向かって疾走するだろう。それが挫折されるか成就されるかは誰も知らないが、大切なのは誇りと目の輝きを失わず、汚れた世界を生き延びるんことなんだと思う。

今回の作品は作者がプロットの構成だけでなく、文章の美しさにこだわって書いたことが分かる小説だった。内陸地方でしか住んだことのない自分も、その文章を読んで作者が唱えた海への憧れが身にしみるほど感じられて、新しい体験をした感覚さえ覚えた。でも登が竜二に会って間もなく彼を慕いはじめること、房子がすぐ竜二に惚れること、そもそも母親のすがたを盗み見するなど、頭では理解しても共感できない箇所もそこそこあった。でも読んで「美しい」と思った作品に久々に出会ってとてもうれしい。自分の読解力を上回る作品を読んで背伸びしてみるのも読書の楽しさかも。

(おわり)

『 レジスタンス 』

私にとって、この小説の初読が遅すぎた。首領や登と同年代に初読できていればと歯痒かった。そして、大人になって久しい現在に再読してみたかった。すでに、登の目線は私には俯瞰でしか味わえないからだ。

私は、思い出した。子供の頃、「子供らしく」振舞っていたことを。大人の望む子供らしさをどこか客観的に理解していた。実際に大人側になってみると、子供のことを掌握してコントロールしていると本気で思ってしまう。子供に見透かされていても知らずに。

子供は大人が考えているほど「子供」じゃないし、大人は子供が考えているほど「大人」じゃないのだ。カントは言う。一番理性的なのは赤ん坊だと。ギリギリ「理性」を保てる13歳にあって、現実と虚構、現実と理想がせめぎ合う。思春期を過ぎても生きていけば、自然に理性が薄れた大人になる。肉体も性欲に飲み込まれるし、本能が理性を凌駕していく。その波間に登たち6隻のタグボートは漂う。

たぶん、房子や竜二は、自らの情事に登がショックを受けていると思っただろう。登は、そんな段階ではなく、世の中で一番醜悪な「父親」に竜二がなることに嫌悪感を抱いているなんて知る由もない。子供の方が、精神の高みにいるのだ。でも、首領たちは「死」でしか、その醜悪な未来は断てないとする。確かにそうだろう。生きていけば、誰でも醜悪になる。依子と房子のマウンティングも平安時代から変わらない。でも、自らの未来を断つのではなく、醜悪な未来の権化である(と考える)竜二の処刑へと舵を切ってしまう。自らの未来を断ち切るために、竜二を曳航してしまう。それが「醜悪さ」への無意味な抵抗だとはまだ理解できない。

でも、まかり間違っても大人になっても、子供時代の「理性」はすっかり忘れてしまうから大丈夫なだけだな。この私のように。だから、醜悪でも生きていけるのだ。ただ、登たちも竜二も現実の「死」からは程遠い。まだ若く生命力に満ち溢れている。だからこそ、「死」を手段として考え、弄べるのだ。現実には「死」が迫っていると全力で逃げるしかない。それは、大人になったら嫌でも理解できる。

作者も、竜二のように誰かに醜悪な未来を断ってほしかったのかもしれない。でも、それは叶うはずもなく、自らの腹に刃を突き立てたような気がしてならない。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

ツイキャスのチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/yuuki27144>

「国体の見張り人兼執行人」

(引用はじめ)

僕たちの義務はわかっているね。ころがり落ちた歯車は、又もとのところへ、無理矢理はめこまなくちゃいけない。そうしなくちゃ世界の秩序が保てない。僕たちは世界が空っぽだということを知っているんだから、大切なのは、その空っぽの秩序をなんとか保っていくことしかない。僕たちはそのための見張り人だし、そのための執行人なんだからね。

(引用おわり)

塚崎竜二が、海を捨て、陸地で平凡な父親になることは、世界の秩序に反する。だから、彼を英雄にするために、この恐るべき子供たちは、彼に睡眠薬入りの紅茶を飲ませ惨殺する。

世界は空っぽだが、空虚の中心は、しっかり埋めなければならない。幕末の尊王攘夷志士も、ことあるごとに天皇を「玉」と呼んではばからなかった。

信じていないものを信じているふりをするという様式性が、日本の政治・社会制度の根底にある「国体」の特徴である。そして、信じているふりこそが、空っぽの秩序を保つために、十全に権威を発揮するのである。

竜二の惨殺は、米軍用地跡で行われる。今は、日本の法のもとにある。占領時代を経た戦後日本にとって、「落ちた歯車」は何であろうか。国体であろうか？ 現人神としての天皇だろうか？

竜二を殺すことが、燔祭であるとすれば、占領後の日本は、神聖な領域を失っているから、その燔祭は、偽りの儀式に過ぎない。何の神に、この偽物の英雄を捧げるのか？

(引用はじめ)

うしろ向きの墓や十字架。それらがみんなむこうへ顔を向けているのならば、僕たちがいるこのうしろ側は、何と名付けられるべき場所なのだろう。

(引用おわり)

大岡昇平の『野火』に、菊花の紋にばってん(十字架)された三八銃が出てくる。十字架の後ろにあるのは、菊花の紋(=国体)であることを意味している。

「男がみな人食い人種であるように、女はみな淫売である。各自そのなすべきことをなせばよいのである。」『野火』

これは、人間の本質である。しかし、その味気なさが我慢ならないので様式を求める。

平和な時代の子どもたちは、猫をなぶり殺し、やがて人をなぶり殺し、空虚なる国体の見張り人兼執行人として自らを育成する。

(おわり)

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714
今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343